

10年ひと昔×6+2年

蒲生 俊敬 海洋化学部門海洋無機化学分野 教授

大気海洋研究所の研究者たちが自らの研究生活について、反省談、失敗談、今だから言える話、などなどを後進に資することを期して語ります。

光陰流水、2年前に還暦を過ぎた。実年齢と精神年齢との隔離が気になるころ。周りには自分より若い人しかいないから、知らず識らず精神年齢が若返る。だが肉体年齢も正しく自覚していないと、いずれ階段を踏み外して大怪我するだろう。この機会に、これまでの人生を遡って、自分の年齢を再認識するのは有益かもしれない。

先ず10年前(52歳)。思いがけず、札幌(北大)から東京に戻るようになった。単身赴任は4年で終わる。最後の冬学期間は掛持ちで、海洋研(中野)と北大を毎週往復した。水曜日(教授会の日は除いて)、朝一番のコロキウムが終わると、羽田空港に駆けつけて札幌へ飛び、午後には北大で講義。夜、真駒内の借家に帰り、1mの積雪を泳ぐようにしてかき分けドアを開ける。冷えきった室内を暖め、凍りついたトイレには熱湯をかけた。金曜日の講義を終えると東京に戻った。間違いなく今より体力があった。

20年前(42歳)。海底熱水活動の研究に最も油がのっていた。前年(1993年)、白鳳丸でイン

ド洋中央海嶺三重点付近に初めて熱水噴出の兆候を掴んだ。1994年は、「よこすか/しんかい6K」航海に参加し、大西洋TAG熱水域の超巨大ブラックスモーカー攻略作戦に没頭した。1995年には、西太平洋マヌス海盆でpH=2.1の強酸性熱水を見つけた。間違いなく今より気力が充実していた。

30年前(32歳)。前年に結婚、長男が生まれた。初めて国外のジャーナル(EPSL)に論文が載る。コロンビア大学ラumont地球研から来てもいいよと言われ、家族で移住の準備を進めていた矢先、父が薨れ長期入院した(翌年死去)。留学は中止せざるを得なくなったが、このとき渡米していたら、その後の研究の方向はかなり変わっていたかもしれない。

40年前(22歳)。学部を卒業し、大学院は自宅に近い中野キャンパスへ。海洋研究所はB棟が完成間近で真新しかった。そのころ映画「日本沈没」を観、深海潜水艇「わだつみ号」の潜航シーンに強く惹かれる(その後、本物の深海潜水艇に15回も乗船したのは、このときのワクワ

ク感が尾をひいたためか)。

50年前(12歳)。小学校を卒業。この先、中学校3年間、高校3年間、さらに大学4年間が続くのかと思うと憂鬱だった。悠々自適な「ご隠居さん」の暮らしに、この頃から憧れていた。

蛇足で60年前(2歳)。流星に記憶はないが、物心ついてから親に聞かされた話がある。家で歌ばかり歌っていた私は、いかなる経緯かNHKラジオのど自慢に出演することになった。しかし本番当日、舞台上でいくら前奏を聞かせても私は口を噤んだままで、あえなく失格。初めて見たマイクروفونなど放送機器の仕組みが気になり、歌どころでなかったらしい(と思いたいが……)。



「しんかい6500」の観察窓から